

ないことが英国流であるという事実にも、学生たちは次第に気づいて行く。

降り立ったアールズ・コート駅は工事中だった。ロンドンでは、また英国では、いつもどこかが工事中だということをこうして実感し、エスカレーターのない階段をスーツケースを抱えて登り、改札を出て道を渡りホテルまで歩く。学生たちはここで初めて煉瓦色の街並みや赤い二階建てバスや黒いタクシーを間近に見て感動しているが、写真を撮る余裕はもはやない。そういえば私が初めてロンドンに来た時も、ヴィクトリアから地下鉄に乗ってこのアールズ・コートに降り立った。今回はもちろん、大学の国際交流課が旅行会社を通して手配してくれたちゃんとしたホテルに泊まるのだが、あの時は林立する安いホテル（通りの北側が割とちゃんとしたホテル、南側が安いホテルのエリアだ）を一軒ずつ訪ね歩き、一番安かったところに泊まったのだった。

ホテルにチェックインを済ませ、各自に部屋のカードキーが渡された。学生たちは若いし、初めてのロンドンなので元気だ。パブに行きたいか、と訊くと一人残らず行きたいと即答したので、一時間後にこのロビーに集合、ということにしてそれぞれの部屋に入る。パブはアールズ・コートにももちろんあるが、せっかくだから前年の引率時に見つけたテムズ川沿いの味わい深いパブまで、地下鉄に二駅ほど乗って行くことにする。前年はもちろんヒースロウからロンドン入りし、宿泊はアールズ・コートより二駅ヒースロウ寄りのハーマスミスだったのだ。パブは川沿いの、かつてウィリアム・モリスが住んでいた家の斜向いにある。この家にはモリスより前の時代に、あのルイス・キャロルの友人で、C・S・ルイスにも多大な影響を与えた作家ジョージ・マクドナルドが住んでいた。

全員で座れるテーブルを片隅に確保し、数名ずつに分かれてカウンターに注文に行く。注文時には必ず ‘please’ を忘れないよう注意を促す。未成年と酒を嗜まない者で、生姜が嫌いでない者には、私の好物でもあるジンジャー・ピアを勧める。これは英国以外では滅多にお目にかかれない伝統的

な清涼飲料である。かつてオクスフォードで、大勢の学生を連れてパブに入ったとき、ジンジャー・ピアを気に入った者が多く皆で何回もお代わりを注文したので、最後にはその店にあったジンジャー・ピアを全部飲み干してしまった、ということがあった。別な年のセミナーではこれを好きになれなかった学生が多く、「先生はなぜこんなに不味いものをいつも何杯も飲むのか」と不思議がられた。そう言えば、私が初めてロンドンに着いた頃には、一人でパブに入る勇気もなかったし、看板に「パブ」と書いてあるわけでもないの、どれがパブなのかもよくわかっていなかった。

木にかかる「青虫」

経営学部

矢田 博士

一、はじめに

本誌20号で、中国の古典においては「青虫」とは青や緑色の虫の総称であること、唐宋の詩においても「蝶蛾の幼虫」に限らず、「イナゴ」「クモ」「セミ」など、いろいろな虫が「青虫」と表現されていることを確認した⁽¹⁾。また本誌21号では、北宋・秦觀の「秋日」詩に詠われている「秋の糸を吐く青虫」が「セミ」である可能性が高いことを指摘した⁽²⁾。

本稿では、唐宋の詩に見える「青虫」の中から、木に棲息し「懸・掛・挂」という語で表現される例を取り上げ、それが何の虫を指すのか、確かめてみたい。なお、「懸・掛・挂」は、いずれも「かかる」と訓み、「ひっかかる」「ぶら下がる・垂れ下がる」「高く中空に浮かぶようにして存在

する」等の意味を表す。

二、木にかかる青虫

唐宋の詩における「青虫」の用例については、唐詩に七例、宋詩に二十五例の計三十二例が確認でき、その中に、木に棲息し「懸・掛・挂」という語で表現される「青虫」の例が四例見られる。

まず、唐・杜甫の五言律詩「課小豎鉏斫舎北果林枝蔓荒穢淨訖移牀」[小豎に課して舎北の果林枝蔓荒穢なるを鉏斫せしめ、淨し訖りて牀を移す]⁽³⁾三首・其二の頷聯に、果樹園の木に「懸かる青虫」を描いて、

青虫懸就日 青虫 懸かりて日に就き
朱果落封泥 朱果 落ちて泥に封ぜらる
《青い虫が木の上の方にかかっている日の光りを浴び、朱い果実が地に落ちて泥に埋まる。》

とあり、北宋・梅堯臣の七言律詩「宮槐」⁽⁴⁾の頸聯に、宮殿の槐の木に「掛かる青虫」を描いて、

青虫掛後蜂銜子 青虫 掛かる後 蜂は子を銜ね
素月生時桂並栽 素月 生ずる時 桂は栽を並ぶ
《宮殿の槐の木に青い虫がかかる頃になると、蜂は巣の中に子を連れ、白く輝く月が出はじめる時、桂は月面に苗木を並べる。⁽⁵⁾》

とあり、北宋・文同の五言律詩「高槐」の頸聯に、高い槐の木に「挂かる青虫」を描いて、

青虫暖自挂 青虫 暖かにして 自ずから挂かり
黄鳥晴輒啼 黄鳥 晴れて 輒ち啼る
《暖くなり青い虫が高い槐の木にかかり、空が晴れて黄色い鳥が囀る。》

とあり、北宋・賀鑄の五言律詩「快哉亭朝暮寓目

^{かいさいてい}「快哉亭にて朝暮に寓目す」二首・其二の頷聯にも、やはり槐の木に「懸かる青虫」を描いて、以下のようにある。

苔衣罽白羽 苔衣 白羽 罽かり
槐蔭懸青虫 槐蔭 青虫 懸かる
《苔には鳥の白い羽がひっかかっており、槐の葉陰には青い虫がかかっている。》

三、「懸・掛・挂」と表現される虫

では、以上の四例の詩に見える「青虫」は、いったい何か。おそらくそれは、以下に挙げる用例から、「クモ」を指す可能性が高いと思われる。

まず、南朝梁・吳均の五言古詩「雜絕句詩四首・其三」に、

蜘蛛簷下挂 蜘蛛 簷下に挂かり
絡緯井辺啼 絡緯 井辺に啼く
《蜘蛛が軒下にかかり、絡緯が井戸の辺りで鳴いている。》

とあり、唐・王維の五言古詩「贈祖三詠」[祖三詠に贈る]に、

蠨蛸挂虚牖 蠨蛸 虚牖に挂かり
蟋蟀鳴前除 蟋蟀 前除に鳴く
《蠨蛸が人気のない窓にかかり、蟋蟀が屋敷の前の階段の辺りで鳴いている。》

とあり、唐・元稹の五言古詩「秋堂夕」[秋堂の夕]に、

書卷滿牀席 書卷 牀席に満ち
蠨蛸懸復升 蠨蛸 懸かりて復た升る
《寝台や敷物のあたりには、たくさんの書籍が置かれている。蠨蛸が垂れ下がってはまた上る。》

とあり、さらに北宋・黃庭堅の五言絶句「次韻吉老十小詩」[吉老の十小詩に次韻す]十首・其五

にも、以下のようにある。

紅梨啄烏鵲 こうり うじゃく ついば
紅梨 烏鵲 啄み
残菊掛蠅蛸 残菊 蠅蛸 掛かる
かきさぎ りんご くも しお
《烏鵲が紅梨を啄み、蠅蛸が萎れかけた菊に
かかっている。》

「懸・掛・挂」という語で表現される虫は何かといった観点から、唐宋の詩を調べてみたところ、「懸・掛・挂」という語が「蜘蛛」「蠅蛸（クモの一種）」とともに用いられる例については、このように容易に見つけることができるものの、その他の虫については、ほとんどそのような例を見出すことはできない。⁽⁶⁾ 一方、「クモ」という虫もまた「青虫」と表現されることがある点については、すでに確認した通りである。

以上のことを総合すると、杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄の詩に詠われている「木にかかる青虫」は、「クモ」である可能性が高いと判断されるのである。

四、おわりに

「かかる」と訓む「懸・掛・挂」という語が、唐宋の詩に詠われる数ある虫の中でも、とりわけ「クモ」の様子を描く際に多く用いられること、それゆえ杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄の詩に詠われている「木にかかる青虫」もまた、「クモ」である可能性が高いことについては、前節で確認した通りである。

ところで、「懸・掛・挂」という語には、「ひっかかる」「ぶら下がる・垂れ下がる」「高く空中に浮かぶようにして存在する」等の複数の意味がある。では、はたして詩人たちは、「クモ」のどのような様子を、「懸・掛・挂」という語を用いて詩に描いたのであろうか。また、杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄の詩に見える「木にかかる青虫」が「クモ」を指すとするならば、なぜ彼らははっきりと「蜘蛛」「蠅蛸」と表現せずに、何の虫かがすぐには特定できないような「青虫」というあいまいな表現をあえて用いたのであろうか。最後に

これらの二点について私見を述べ、本稿の結語としたい。

第一点目について。例えば、唐・元稹「秋堂夕[秋堂の夕]」の「蠅蛸懸復升」などは、「懸かりて」の後に「復た升る」と続くことから、「蠅蛸が垂れ下がるさま」を「懸」という語で表している例と見てよいであろう。では、そのほかの全ての例でも、「懸・掛・挂」という語が「クモの垂れ下がるさま」を表しているのであろうか。もちろんそのように解釈した方がふさわしいと思われる例はほかにも見られるであろうが、全ての例がそうであるとは限らないであろう。毎年秋になると、葉を落とした木の枝と枝との間に網を張り、その中心で静かにじっと獲物がかかるのを待ち続けるクモの姿をよく目にすることがある。その姿を観察していると、網の向こうに空が透けて見え、あたかもクモが中空に浮かんでいるかのような錯覚を覚えることがある。あるいはそのようなクモの姿を「懸・掛・挂」という語で表した例も、中にはあるのではないだろうか。例えば、杜甫や梅堯臣などの詩に見える「木にかかる青虫」の例などは、そのように解釈した方がふさわしいように思えるのである。

第二点目について。なぜ杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄は「クモ」を表現するにあたり、すぐには何の虫かが特定できない「青虫」というあいまいな表現をあえて用いたのか。その理由は、おそらく彼らの詩がいずれも律詩である点に求められるであろう。杜甫と賀鑄の例は律詩の頷聯、梅堯臣と文同の例は律詩の頸聯にあたる。律詩の頷聯と頸聯は原則として対句にしなければならない。つまり、彼らが「クモ」という虫を「青虫（青い虫）」と表現したのは、「朱果（^{あか}朱い果実）」「素月（^{しろ}素い月）」「黄鳥（黄色い鳥）」「白羽（白い羽）」と対にするためであったと考えられるのである。

【注】

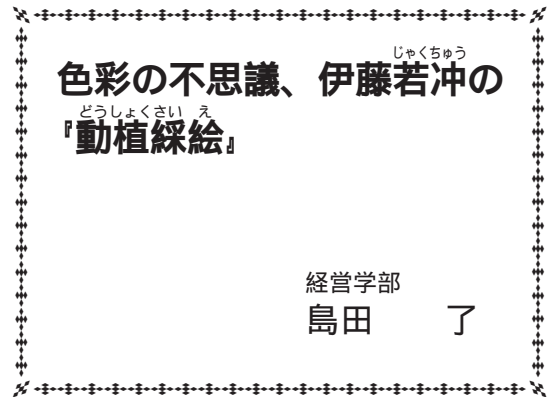
- (1) 「中国古典詩歌に見える「青虫」」(『語研ニュース』20号、2008年12月)を参照。なお、【蜘蛛と思われる例】の箇所、南宋・俞德隣の詩に見える「戸口のあたりで糸を織る青虫」

について、南朝梁・沈約や唐・元稹の詩を手がかりに「クモ」と判断したが、より分かりやすい例として、南朝梁・何遜の「劉博士江丞朱從事同顧不值作詩云爾[劉博士・江丞・朱從事 同に顧みらるるも値わず、詩を作りて爾か云う]」という五言古詩に、以下のようないくつかあることに気づいたので、補足しておく。

蜘蛛正網戸 蜘蛛 正に戸に網し
落花紛入膝 落花 紛として膝に入る
《蜘蛛はちょうど戸口の当たりに網を張り、花びらはひらひらと部屋に入り膝もとに落ちる。》

- (2) 「秋の糸を吐く青虫」(『語研ニュース』21号、2009年5月)を参照。
- (3) 詩題の意味は、「子供に仕事を割り当て、家の北にある果樹園の枝や蔓および荒れてきたないものを鋤いたり切らせたりし、きれいになったのでそこに椅子を持ち出した。」というもの。
- (4) 正確な詩題は、「和范景仁王景彝殿中雜題[范景仁・王景彝の殿中雜題に和す]三十八首」の其十「宮槐」。
- (5) 「素月」の句は、おそらく月には桂の木が生えているという伝説を踏まえるものと思われる。ここでは、新月から満月へと月が満ちるに従い、月面の桂の木も苗木から徐々に生長する、という方向で解釈してみた。
- (6) 唐・雍陶の七言律詩「秋居病中」の頸聯に、
荒簷数蝶懸蛛網 荒簷 数蝶 蛛網に懸かり
空屋孤螢入燕巢 空屋 孤螢 燕巢に入る
《数匹の蝶が荒れ果てた軒に張られた蜘蛛の網にひっかかり、一匹の螢が人気のない家屋に作られた燕の巣の中に入る。》
とあるように、蜘蛛の網にひっかかる蝶を「懸」という語で表現した例はある。また、隋・薛道衡の五言古詩「昔昔鹽」に、
暗牖懸蛛網 暗牖に 蛛網 懸かり
空梁落燕泥 空梁に 燕泥 落つ

《暗い窓に蜘蛛の網がひっかかり、人気のない家屋の梁から燕の巣の泥が落ちる。》
とあるように、窓にひっかかる蜘蛛の巣を「懸」という語で表現した例もある。いずれにしる、「懸・掛・挂」は「クモ」と縁の深い語と言えそうである。



ドイツの国旗は何色でしたかという質問をしたらどうだろうか。フランスの国旗なら誰だってすぐに答えられるだろう、青、白、赤だ。いろいろなところで目にするし、さわやかで素敵な印象を与えるから簡単には忘れない。でもドイツはどうだったか、子供の頃小学校の運動会でかかっていた万国旗のなかのどれかだった、でもどれだったかな。確かに日ごろめったにお目にかかるものではない、知らなくたって恥ずかしくもなともない、わからなければ調べればいいだけだ。手ごろな図鑑、最近ならネットを使えばすぐわかるはずだ。しかしこのとき図版だけを見て答えてはいけない。図版を見れば、上から順番に黒、赤、黄となっている。しかしこれは不正解、文字解説を見れば、黒、赤、金と書いてある、こちらが正解なのである。

あらためて図を見てもどうみても黄色にしか見えない、確かに印刷してあるのは黄色である。じつはこれは、約束事のひとつなのである。紋章学というものがあり、歴史上の王族や貴族の持つ紋章を分類したりする学問がある、また王政をとっている国では紋章を管理する役所もある。たとえ